

当院における輸血副作用発生状況の解析

◎森川 潤也¹⁾、澤田 彩香¹⁾、吉村 公利¹⁾、中村 愛望¹⁾、家原 和章¹⁾
社会福祉法人恩賜財団済生会 大阪府済生会野江病院¹⁾

【はじめに】輸血療法において輸血副作用（感染症、免疫反応）のリスクを完全に回避することはできない。そのため輸血副作用の発生状況を把握することは極めて重要である。今回、当院での過去3年間（2015年4月～2018年3月）の輸血副作用発生状況を解析したので報告する。

【対象】2015年4月～2018年3月に使用された血液製剤（RBC：6978バッグ、PC：1135バッグ、FFP：1863バッグ）を対象とした。

【方法】当院での副作用報告は、電子カルテ（富士通社：EGMAIN/GX）で輸血終了処理時に、輸血副作用の有無を入力し、連携している輸血管理システム（BIO-RAD社）で確認している。今回は3年間の血液製剤別、診療科別、症状別についての解析を行い、副作用の発生時間帯についても調査した。

【結果】使用した血液製剤の副作用報告率は100%であった。3年間での副作用発生件数は68件あり、血液製剤別ではRBC：37件、PC：23件、FFP：8件であった。診療科別では血液内科：26件、消化器外科・消化器内科・救急集中治

療科：各6件、整形外科・泌尿器科：各5件が上位を占めた。症状別で最も多かったのが、蕁麻疹等：33件となり、発熱：21件、掻痒感：16件、悪寒・戦慄：12件などが続いた。副作用の発生時間帯については、開始時：1件、5分後：2件、15分後：1件、15分後～終了前：24件、終了時：32件、終了後：8件という結果となった。

【考察】今回の解析で、15分後～終了までの間に副作用が発生している事例が大半を占めていることがわかった。症状が軽微な場合は経過観察するか、内服する事で輸血を続行できた為と考えられる。

輸血システムに報告されている症状と看護記録に記載されている症状が微妙に違っている場合があったので、この微妙な違いを早期に発見するためには医師・看護師・検査技師の協力と正確な情報共有を行うことが必要と考える。